

大学生の車椅子利用者への援助行動に関する実験的研究 —対人距離と傍観者介入の影響— 加茂川 文

I. 問題と目的

行動を見る指標の一つとして、日常的に観察できる援助行動がある。しかし、健常者に対する援助行動の研究 (Latane&Darly, 1970) はあるものの、障害者に対する研究は見当たらない。

一方で、障害者に対する意識や態度についての研究は数多く、困っていれば助けたいというような具体的な態度の得点は低かった (生川, 1995) ことなどから、援助行動に関して議論は行われている。また、態度が形成されたとしても、その態度が具体的な行動に結びつくかは明らかではない。それは人間の行動を決める要因は非常に多く、要因の特定が困難なためである (徳田, 2005)。

そこで本研究は、大学生を対象に実験を行い、外見から障害があると分かりやすい車椅子利用者に対して援助行動が行われる条件を明らかにし、障害者への態度を検討することを目的とした。

II. 研究 1

1-1. 研究目的

車椅子利用者が被援助者の場合、対人距離が援助可能者の援助行動に与える影響を調べることが目的とする。

1-2. 被験者

A大学の学生 49名である。

1-3. 実験条件

本実験では、車椅子利用者に扮した協力者 (以下「車椅子利用者条件」とする) と健常者として振舞う協力者 (以下「健常者条件」とする) が参加した。なお、協力者は以下「サクラ」と呼ぶ。

被験者は、Harada&Araragi (1981) を参考にし、1 m, 2 m, 3 m の三条件で指定した席に座った。なお各条件を「車椅子利用者 1 m 条件」「車椅子利用者 2 m 条件」「車椅子利用者 3 m 条件」

「健常者 1 m 条件」「健常者 2 m 条件」「健常者 3 m 条件」とした。

1-4. 実験手続き

「サクラ」が①床に落ちた鉛筆を拾う場面、②開き戸の部屋から退出する場面、の2場面を含めた一連のストーリーを完成させた。以下それぞれの条件について説明する。

(1) 「車椅子利用者条件」

実験は A 大学にある演習室で行われた。演習室には「車椅子利用者」に扮したサクラが既に座って待っていた。「車椅子利用者」に扮したサクラの手元には、記入済みのアンケート 1 枚、鉛筆 1 本、消しゴム 1 つが置かれていた。演習室に用意してある机 5 つのうち、3 つには机の上や脇に筆者の私物があり、「この席は既に誰かが使っている。」ということを間接的に示し、被験者が座る位置を統制した。

別室に待機していた被験者は、筆者に案内されて演習室に入室した。被験者は、筆者の「空いている席にお座りください。」という指示に従い、統制された席に座った。

被験者と「車椅子利用者」に扮したサクラの 2 名が着席したのを確認したところで、筆者は被験者に対して「アンケートの準備をしますので、少しお待ちください。」と伝えた。

一方、「車椅子利用者」に扮したサクラに対しては「先ほどの方は、書き残しがないかを確認して、なければ前にある箱に提出してください。その後退出していただいて構いません。」と伝え、「車椅子利用者」に扮したサクラは被験者よりも前にアンケートの記入とヒアリングを終えていたことを間接的に示した。

その後、筆者はアンケートの準備と称して演習室を退出し、演習室周辺の廊下に待機した。したがって、被験者は、筆者がアンケートを用意するまで、その場で待たなければならなかった。

「車椅子利用者」に扮したサクラは用紙の書き残しがないか確認した後、提出する箱の方に進み、4 本の鉛筆が入ったペン立てに、鉛筆 1 本と消し

ゴム1つを入れ、箱にアンケートを提出した。その際に左手をペン立てに当てて倒し、中に入っている鉛筆5本と消しゴム1つを床に落とした。なお、被験者に鉛筆と消しゴムが床に落ちたことを確実に気付かせるために、ペン立ては落ちると音が鳴るような缶を使った。「車椅子利用者に扮したサクラ」は床に落とした鉛筆と消しゴムを全て拾うことを試み、ペン立てを元の場所に戻した後、演習室の開き戸を開けて退出した。

「車椅子利用者に扮したサクラ」が退出した後、筆者が演習室に再び入室し、被験者にアンケートを渡し回答を求めた。アンケートを回収した時点で、本実験の趣旨を伝えた。

(2) 「健常者条件」

「健常者条件」では、(1)「車椅子利用者条件」での「車椅子利用者に扮したサクラ」を「車椅子利用者に乗っていないサクラ」に変えた他、手続きは同様であった。

1-5. 分析場面・分析方法

(1) 援助生起率について

「サクラがアンケートを演習室の前にある箱に提出する際に、ペン立てに入っている鉛筆を床に落とす場面」(以下「場面1」とする)において、それぞれの条件で被験者が鉛筆を1本以上拾ったら援助行動が生起したとみなした。援助生起率は「援助行動が生起した試行数÷(援助行動が生起した試行数+援助行動が生起しなかった試行数)×100」で算出した。

(2) 反応潜時について

「場面1」において反応潜時を計測した。反応潜時は、「サクラがペン立てを落としてから、被験者が椅子から腰を浮かすまでの時間」とした。なお、援助行動が生起しなかった場合は、「サクラ」が1人で鉛筆を拾う時間が最もかかった秒数である「25秒」を上限として反応潜時とした。

(3) 援助行動の内容について

「車椅子利用者条件」の場合、「場面1」の鉛筆を拾う援助行動の有無と、「サクラが床に落とした鉛筆をペン立てに戻した後、開き戸の部屋から退出する場面」(以下「場面2」とする)に

おける、「サクラ」が退出する際の三種類の援助行動のうち、初発の援助行動について記録した。

1つ目は、「車椅子利用者に扮したサクラ」がドアノブに手をかける前に開き戸を開ける「ドア開け」である。2つ目は、「車椅子利用者に扮したサクラ」が退出しやすいように開き戸を押さえる「ドア押さえ」である。3つ目は、「車椅子利用者に扮したサクラ」が演習室の外に出た時に、サクラがドアノブに手をかける前に開き戸を閉める「ドア閉め」である。つまり、最も早く生起する援助行動は「ドア開け」であり、次いで「ドア押さえ」、「ドア閉め」となる。

(4) 援助行動を行う前の声かけの有無について

「声かけ」は床に鉛筆を落とした後や退出時に、「大丈夫ですか?」というような相手を気遣う言葉や、「(私が鉛筆を)拾います。」「(私がドアを)開けます。」というようなこれから行う援助行動を宣言する言葉、または「(私がドアを)開けましょうか?」のような相手の意思を尋ねる言葉などがある。以上のことから、「声かけ」を「被験者が「サクラ」に対して援助行動を行う前に「これから私があなたを援助します。」という意味を含んだ言葉をかけること」と定義した。

「車椅子利用者条件」の場合、「場面1」と「場面2」の2場面において、「援助行動を行う前に、被験者は「サクラ」に対して「声かけ」を行ったか」を記録した。

1-6. 結果

(1) 援助生起率について

① 「車椅子利用者条件」

	援助生起率	人数
1 m条件	87.5%	8人中7人
2 m条件	100%	8人中8人
3 m条件	88.89%	9人中8人

② 「健常者条件」

	援助生起率	人数
1 m条件	0%	8人中0人
2 m条件	12.5%	8人中1人
3 m条件	0%	8人中0人

「車椅子利用者条件」と「健常者条件」では援助生起率に差があった。また両条件に共通して、「2 m条件」では援助行動が生起しやすかった。

(2) 反応潜時について

①「車椅子利用者条件」「健常者条件」の比較

Table3「1m条件」における反応潜時(比率)

尺度	車椅子利用者条件	健常者条件	t 値	t 検定
	(n=8) M(SD)	(n=8) M(SD)		
反応潜時	0.17(0.3379)	1(0)	6.9478	***

注)***:p<0.01

Table4「2m条件」における反応潜時(比率)

尺度	車椅子利用者条件	健常者条件	t 値	t 検定
	(n=8) M(SD)	(n=8) M(SD)		
反応潜時	0.115(0.0621)	0.915(0.0204)	9.1126	***

注)***:p<0.01

Table5「3m条件」における反応潜時(比率)

尺度	車椅子利用者条件	健常者条件	t 値	t 検定
	(n=8) M(SD)	(n=8) M(SD)		
反応潜時	0.204(0.3023)	1(0)	7.8954	***

注)***:p<0.01

t 検定を行った結果、「サクラ」が「車椅子利用者条件」の場合、被験者が援助行動を行うまでの反応潜時は有意に早かった。

②対人距離の比較

Table6「車椅子利用者条件」における反応潜時(比率)

分散分析	
F(2, 22)=0.2416	n. s

注) n.s.:有意差なし

Table7「健常者条件」における反応潜時(比率)

分散分析	
F(2, 22)=0.2416	n. s

注) n.s.:有意差なし

分散分析を行った結果、「サクラ」が「車椅子利用者条件」の場合でも「健常者条件」の場合でも、対人距離は被験者が援助行動を行うまでの反応潜時に影響を与えていなかった。

(3) 援助行動の内容について

「場面1」で「鉛筆を拾う援助行動」が生じた場合は「拾う」、「鉛筆を拾う援助行動」が生じなかった場合は「拾わない」、「場面2」で「三種類の援助行動(「ドア開け」、「ドア押さえ」、「ドア閉め」)を行わなかった場合は「何もしない」とした。

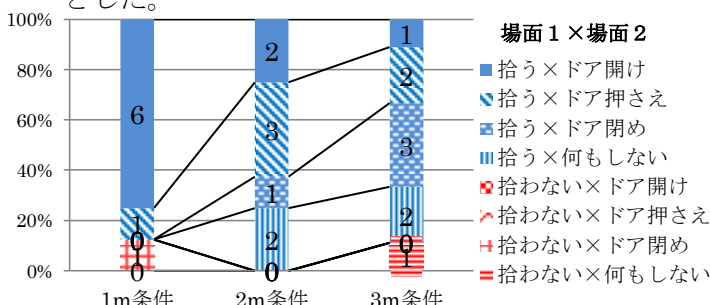


Fig.1「鉛筆を拾う援助行動」と「三種類の援助行動」の組合せ対人距離によって援助行動は異なった。特に

「場面2」では、対人距離が近いほど「ドア開け」のような早い援助行動、遠くなるほど「ドア押さえ」、「ドア閉め」など遅い援助行動が生じた。

(4) 援助行動を行う前の声かけの有無について

「場面1」と「場面2」で、「声かけ」をして援助行動を行った場合は「声かけ」、「声かけ」をせずに援助行動を行った場合は「無言」、援助行動を行わなかった場合は「何もしない」とした。

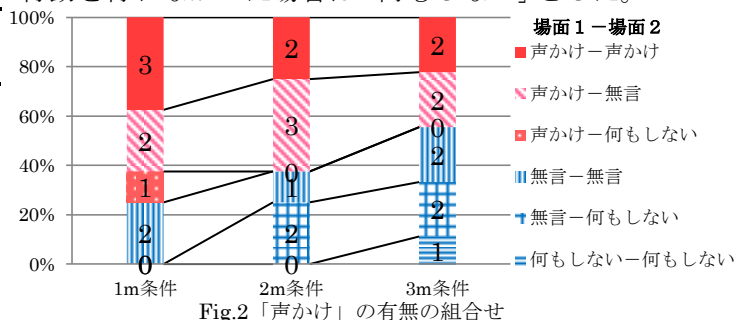


Fig.2「声かけ」の有無の組合せ

半数以上が「場面1」と「場面2」のどちらかで声をかけたが、声をかけない被験者も数名いた。

III. 研究2

2-1. 研究目的

研究1により、「サクラ」が車椅子に乗っている場合に援助行動が誘発されることが分かった。

そこで、この条件で被験者以外に同室に誰か(以下「傍観者」とする)がいる場合では、援助行動は変化するのかを調べることを目的とした。

2-2. 被験者

A大学の学生14名である。なお、全て研究1には参加していない。

2-3. 実験条件

本実験において、「被験者以外にサクラに対して援助行動を行うことができる状況にいる人」を「傍観者」と定義した。「傍観者」と被験者が着席する位置は、研究1で最も援助行動が生じやすかった2mの位置の席とした。

(1)「援助文脈あり傍観者条件」

「傍観者」が入室時に「サクラ」が乗っている車椅子を押して席に誘導をした後に、所定の位置に着席してから実験を行った。つまり、被験者に対して「傍観者」が「サクラ」への介助を行っていることを間接的に示した。

(2)「援助文脈なし傍観者条件」

「傍観者」と「サクラ」は被験者より前に既に

演習室におり、座って待っていた。つまり、被験者に対して「傍観者」が「サクラ」への介助を行っていないこと」を間接的に示した。

(3) 「傍観者なし条件」

「傍観者」がいない、つまり被験者と「サクラ」以外はいない条件であった。ここでは、研究1の「車椅子利用者2m条件」の結果を用いた。

全ての条件において、分析場面・分析方法は研究1と同様であった。

2-4. 結果

(1) 援助生起率について

Table8 援助生起率

	援助生起率	人数
援助文脈あり傍観者条件	100%	7人中7人
援助文脈なし傍観者条件	85.71%	7人中6人
傍観者なし条件	100%	8人中8人

若干1名の差であった。「傍観者」の存在によって、援助生起率にそれほど大きな差はなかった。

(2) 反応潜時について

Table9 「傍観者なし条件」と「援助文脈あり傍観者条件」の比較

尺度	傍観者なし条件 (n=8) M(SD)	援助文脈あり傍観者条件 (n=7) M(SD)	t 値	t 検定
反応潜時	0.115 (0.0621)	0.0971 (0.039)	0.6544	n. s

注) n.s.: 有意差なし

Table10 「傍観者なし条件」と「援助文脈なし傍観者条件」の比較

尺度	傍観者なし条件 (n=8) M(SD)	援助文脈なし傍観者条件 (n=7) M(SD)	t 値	t 検定
反応潜時	0.115 (0.0621)	0.2229 (0.3516)	-0.8006	n. s

注) n.s.: 有意差なし

t 検定を行った結果、「傍観者」の存在は、被験者が援助行動を行うまでの反応潜時に影響を与えなかった。

(3) 援助行動の内容について

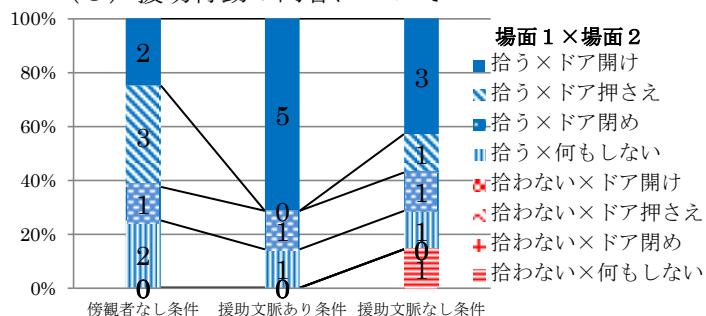


Fig.3 「鉛筆を拾う援助」と「三種類の援助行動」の組合せ

「傍観者」の存在により、同じ対人距離でも援助行動は異なった。

(4) 援助行動を行う前の声かけの有無について

半数以上が「場面1」と「場面2」のどちらか

で声をかけたが、声をかけない被験者も数名いた。

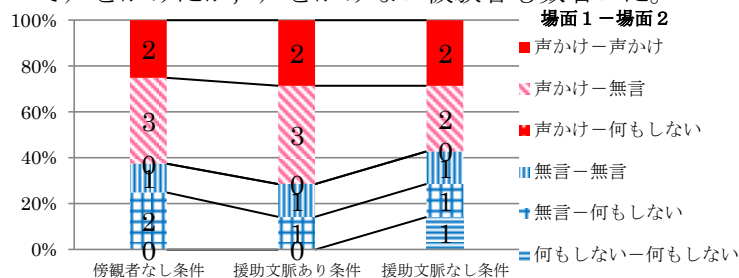


Fig.4 「声かけ」の有無の組合せ

IV. 考察

本研究では、車椅子利用者が被援助者の場合、援助行動が最も生じやすかった条件は対人距離が2mの場合であった。これは、健常者が被援助者の場合と同様であった (Harada & Araragi, 1981)。一方で、車椅子利用者が被援助者の場合は、どの対人距離でも援助行動が生起した。これは、車椅子利用者への援助行動の特徴と言えよう。

また、「傍観者」が「サクラ」に対して介助を行っていない場合、被験者の援助行動が分散した。これは、他者の存在により援助行動が抑制される「傍観者効果 (Latane & Darly, 1970)」が生じたことが考えられる。

一方で、「傍観者」が「サクラ」に対して介助を行った場合、「鉛筆を拾い、開き戸を開ける」が最も多く、積極的に援助行動が行われた。山崎・佐竹・保坂 (1993) は付添人を伴った車いす使用者の買い物での会話を分析し、店員は車いす使用者ではなく付添人に対して働きかけたことを説明している。本実験でも、被験者が、鉛筆を拾ったりドアを開けて退出したりした当事者の様子ではなく、実験前の入室時の介助に注目したため、援助行動を行った可能性がある。つまり、障害がない者は、障害当事者の意思や様子を抜きにして、援助や支援を行う可能性が示唆できる。

V. 参考文献・引用文献

Junji Harada・Chitoshi Araragi (1981) *The Effects of Interpersonal Distance and Number of Potential Helper on Helping Behavior*, 実験社会心理学研究 第21巻 第1号, 35-39

Latane, B., & Darly, J.M. (1970) *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Appleton-Century-Crofts. 竹村研一・杉崎和子訳 (1977) 冷淡な傍観者: 思いやりの社会心理学, プレイン出版

生川善雄 (1995) 精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多角的な研究—態度と接触経験, 性, 知識との関係—, 特殊教育学研究 32, (4) 11-19

徳田克己 (2005) 障害理解の測定, 徳田克己・水野智美編著「障害理解—心のバリアフリーの理論と実践—」, 誠信書房

山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正 (1993) 相互行為場面におけるコミュニケーションと権力—車いす使用者—のエスノメソドロジック的研究, 社会学評論 Vol44, No1, 30-44